



# "Kafka Kaikoku"

Kafka Kaikoku (カフカ開国) 書き下ろし新作

作：多和田葉子

演出：嶋田三朗

出演：市川けい、フランチスカ・ピーシェ、アマンダ・シュッツェ、  
アレハンドラ・ラングナー、齋藤由美子、キム・ヨンクワン、とりのかな

音楽演奏：Peter Ludwig Beierlein (ピアノ)、  
嶋田三朗 (和太鼓)

舞台上で絵を描く人：Stephan Köhler

ビデオ撮影製作：Bernd Freyer

舞台美術：嶋田三朗

衣装製作：劇団らせん館

日時：2011年

2月9日(水)、10日(木)、11日(金)、16日(水)、17日(木)、18日(金)

開演時間 19時30分。

会場：Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Saargemünder Straße 2, 14195 Berlin

交通：U-Bhf: Oskar-Helene-Heim (U3)

・電話予約をお願いします。030 839 07 123 (JDZB)

ベルリン日独センターウェブサイト [www.jdzb.de](http://www.jdzb.de)

劇団らせん館ウェブサイト [www.lasenkan.com](http://www.lasenkan.com)

『カフカ開国』について、多和田葉子氏はインタビューで次のように話しています。：

これは、ドイツ語の「ウンゲツィーファー」という単語をめぐる劇と言っていいかもしれませんが。カフカの『変身』ではみなさんご存じのように、主人公グレゴール・ザムザがこの「ウンゲツィーファー」に変身してしまいますが、邦訳は「害虫」その他いろいろありますね。クルーゲ語源辞典で調べてみると、この単語はもともと「不浄な動物」、おそらく「不浄なので、生け贄にふさわしくない動物」という意味であったろうと書かれています。変身してしまったグレゴールはもう仕事ができなくなる、あるいは仕事をしなくてもよくなるわけです。両親の借金を返すために働かなければならなかったはずが、変身してしまっただけで不思議なことに、借金の方はもう問題にされず、結局は家族がグレゴールの妹の結婚に未来への希望をたくすことで終わっています。『カフカ開国』はこの謎に満ちたカフカの「変身」を芝居にしたものですが、同時に日本の開国に関する物語でもあり、「夜叉が池」が出てきて、泉鏡花自身も登場します。鏡花は、日本の近代化が始まって江戸時代の妖怪を忘れることなく、怪しい世界を言語の中にすくいとることに成功した作家だと思います。

『カフカ開国』では、ある国で作った作品をもう一つの国に輸出するのではなく、作り上げる過程で既に、わたしたちが生活し、稽古し、シュピーレンしている場所から学びたいと思いました。この場合、場所というのはドイツ語のことです。「シュピーレン」というドイツ語には「芝居を上演する」という意味もありますし、言葉遊びをする場合の「遊び」もシュピーレンですね。前者はらせん館の仕事、後者はわたしの仕事です。このお芝居には日本語の部分もありますが、その部分は意味が分からなくても、音として楽しめると思います。

(引用：ベルリン日独センター広報紙 93 号、2010 年 12 月

インタビュー全文は、ベルリン日独センターのホームページでご覧いただけます。)

劇団らせん館は1997年から多和田葉子作品「アルファベットの傷口」「ティル」「飛魂」「サンチョ・パンサ」「絵解き」「舞台動物」「粉文字ベルリン」「出島」「旅をする裸の眼（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ＋Ⅳ）」を上演。1989年以来、世界17カ国で公演。諸文化の狭間において有効な現代演劇の開発を目指している。

今回、「カフカ開国」公演にあたり、今日の今を新しくひらくように、いろいろな人と協力して、公演することになりました。ここから新しい劇を開きたいと、毎日稽古しています。ぜひ、お越し下さい！

劇団らせん館一同